



登校の子らを抱きて山笑う

朝、鶯のさえずりを聞きながら職員室を出る。桜階段を上ってきた兄弟・姉妹が、浣渌と挨拶をしてくれる。米山橋まで来ると、やがて新東名高速道路の橋脚をくぐって安戸町の通学班が現れる。新緑の中を近づいてくる黄色の帽子の列。その美しさに見とれていてふと振り返れば、米河内町の通学班が迫っている。新一年生も大きなランドセルを揺らし、一步一步確かな足取りで坂道をやってくる。そのランドセルを時折支える上学年の思いやり。

「おはようございます」三メートルも五メートルも先から、真っ先に挨拶をしてくれる子が何人もいる。それをきっかけに一人一人から朝の挨拶を受ける。視線が合うのが心地よい。見守り隊の皆さんや車で送ってくれた家族に見送られた子供たちは皆、校門に吸い込まれるようにして桜階段を上っていく。その後姿は、白い校舎に向かって光が集まっていくように見える。

—常磐東の光— 本校創立百二十年の宣言にあるとおり、子供



たちは学区の、家族の、学校の光である。そして、ゆくゆくは社会の光となるだろう。校歌の二番の歌詞「正しく鍛える身と心」のとおり、近藤前校長の指導下で一層磨かれた子供たちの姿勢や態度は、現在にとどまらず、将来にわたって通用するものである。このような生活の基盤をしっかりと固めた子供たちとともに目指すのは、校訓「求めてはげむ」の姿である。この「求めて」という内発的な力を高めるには、理想や目標が明確にあること、それに近づきたいと向上心をもつこと、自分にはやり遂げる力があると自信をもつこと、怠け心に打ち勝って努力することに、あるいは失敗してもあきらめずに努力し続けることに価値を感じられること等がある。学校では子供に新たな刺激や出会いを与えつつ、一人一人の良さを認めるとともに、友達と語り合う場づくりを工夫すること、気付きを行動に移す場を設けること、時にはともに苦しみを分かち合うことで、導いていくつもりである。

「緑とともに生きる」常磐東学区の緑は豊かで、今は若葉が格別に瑞々しく華やいでみえる。校長便りの「常磐緑(ときわみどり)」は、榊(さかさき)のような常緑樹の色を指す。「常盤色」「エバーグリーン」とも言い、不朽を意味する。

令和五年度の常磐東小は、新たに八名の一年生を迎え、児童数四十七名でスタートした。瑞々しい若葉も、日を追うごとに濃さを増す。のびのびと活動する子供を包む山や森のような、懐の深い学校として子供たちを支えたい。

